

# 1. 居住地域への態度と近隣の関係

石 塚 優

## I. 居住地域への態度

### 1. 住んでいる地域に対する考え（問1）

現在住んでいる地域（小学校区くらい）についてどう思いますかという質問をまとめて集計した結果が図1である。この質問は「今後もこの地域に住み続けたい」「この地域のために役に立ちたい」等の考えについて「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」で回答する形式であるが、「そう思う」「まあそう思う」を合計して集計した結果を「住んでいる地域への態度」として図に示した（質問、単純集計結果等は付録を参照）。

結果は全体、性別、年代別として図に示しているが、全体では「今後もこの地域に住み続けたい」「全体的に地域の住み心地は良い（以下：地域の住み心地）」「地域のことをほめられたら自分のことのようにうれしい（以下：ほめられるとうれしい）」「この地域のために役立ちたい（以下：役立ちたい）」に関しては「思う」と回答した人が7割以上を示している。しかし、「自分は地域の活動にはよく参加する方だ（以下：活動参加）」「この地域は、これから先、生活の場としてだんだん良くなる（以下：良くなる）」「この地域の人たちは地域を良くしようとする気持ちが強い（以下：良くしよう）」等、自らが地域のために活動したり、そのための意欲を地域の人が持つる等に関しては「この地域のために役立ちたい」という回答に反して、必ずしも多くの人が「思う」と回答していない。地域に愛着があり、今後も徐々によくなると思う反面、そのための活動には消極的であるという態度を示唆している。

性別の特徴は、地域への愛着、地域を良くするための活動参加や意欲ともに「思う」と回答した人が男性に比べて女性の方が多くあることである。

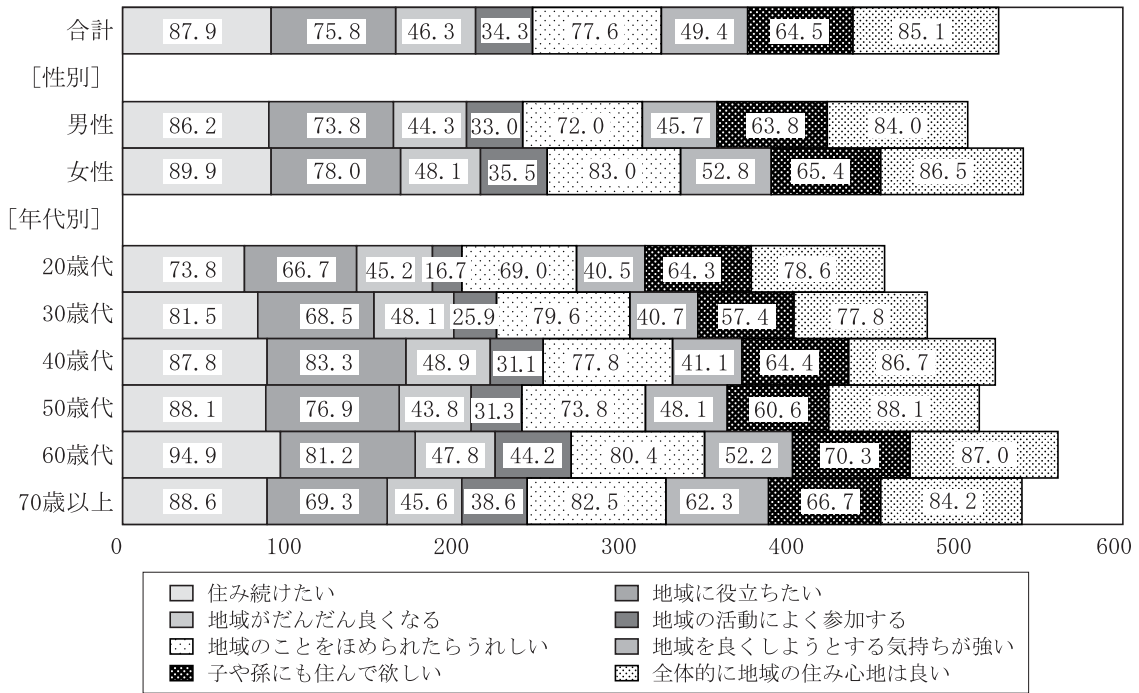
年代別では、年代が高くなるほど地域への愛着、地域を良くするための活動参加や意欲に関しても「思う」と回答した人が多くなるのが特徴である。ただし、「役立ちたい」に関しては年代によりばらつきがある。

### 2. 住んでいる地域の評価（問2）

この質問は、住んでいる地域（小学校区くらい）の12の生活環境の側面について「良い」「やや良い」「やや悪い」「悪い」で回答する形式である。ここでは、回答を「良い」「やや良い」を加えて「良い」として集計した結果を「住んでいる地域の評価」として図2に示している。

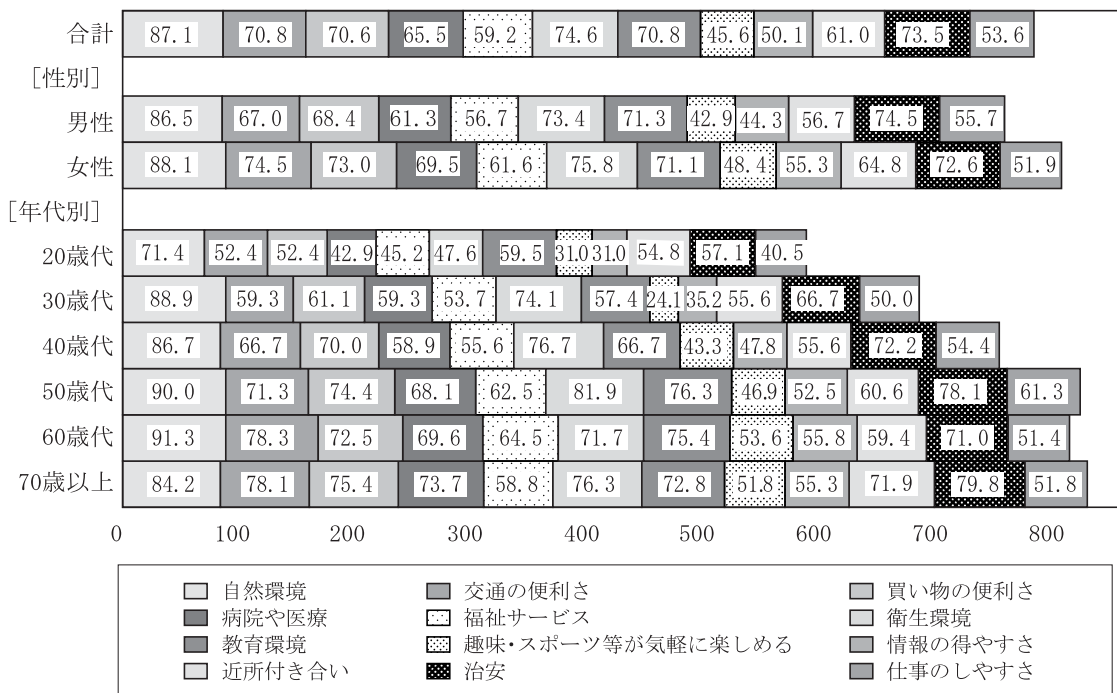
図は12項目を内訳図として全体、性別、年代別で示しているために、数値が見えにくい面もあ

図1 住んでいる地域への態度



るが、全体でも性別でも年代別でも、最も多くの方が「良い」と評価したのは「自然環境」である。年代別の20歳代が7割台を示している以外は性別で見ても年代別で見ても8割以上が「良い」と評価している。続いては「衛生環境」「治安」「交通の便利さ」「教育環境」「買い物の便利さ」等の評価が高い。逆に評価が低いのは「趣味やスポーツ・文化を気軽に楽しめる（以下：趣味等）」

図2 住んでいる地域の評価



「生活に必要な情報の得やすさ（以下：情報）」「福祉サービス」等であるが、「趣味等」を除けばいずれも5割以上の人が「良い」と評価している。

性別では、女性の方が「良い」と回答した人が男性を上回り、多くの生活の側面で評価は高いのであるが、「仕事のしやすさ」「治安」に関しては男性よりも評価が低い傾向がある。

年代別では、多くの生活の側面について年代が高くなるほど評価は高くなる傾向がある。20歳代での「良い」評価は「自然環境」を除いた他の側面で3割台～5割台の評価に止まっているのに対して、「情報」を除くすべての側面で5割～9割を超える人が「良い」と評価している50歳代以上の評価が高い。

## II. 近隣との関係

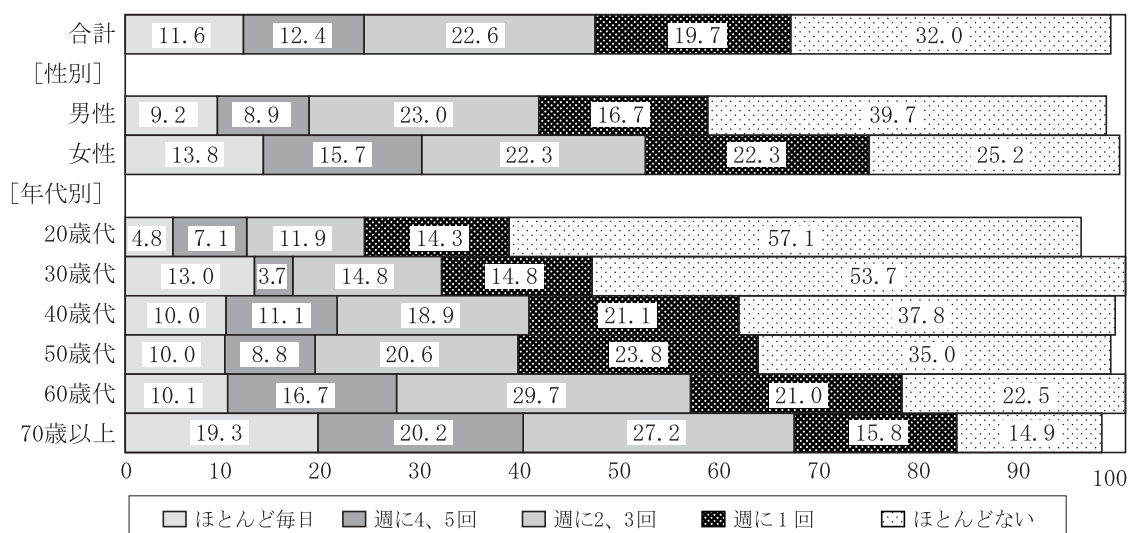
### 1. 近所の人との会話（問3）

質問は「週に何回ぐらい、近所の人たちと話をしますか」である（詳細は付録参照）。

結果は図3の通り、全体では「ほとんどない」が約3割で最も多く、約2割の「週に3、3回」「週に1回」が続く。「毎日」や「週に4、5回」は1割程度である。

性別や年代別の違いは明らかで、図の通り女性の方が近所の人と話をする頻度は多く、年代別では、年代が高くなるに従って会話の頻度が多くなる。これは、女性の方が地域に関わる役割（例えば、町内自治会の子ども会、婦人会、老人クラブの世話等）を男性に比べてより多く担っていることによるのかも知れないし、年代別では居住年の長短が反映しているのかも知れない（これらについても質問しているので付録を参照）。

図3 近所の人との会話の頻度



### 2. 近所の人との付き合いかた（問3-1）

#### ① 近所の人との付き合いかた

上記の問で、近所の人と話を「ほとんどしない」と回答した人と「無回答」を除いた400人に、

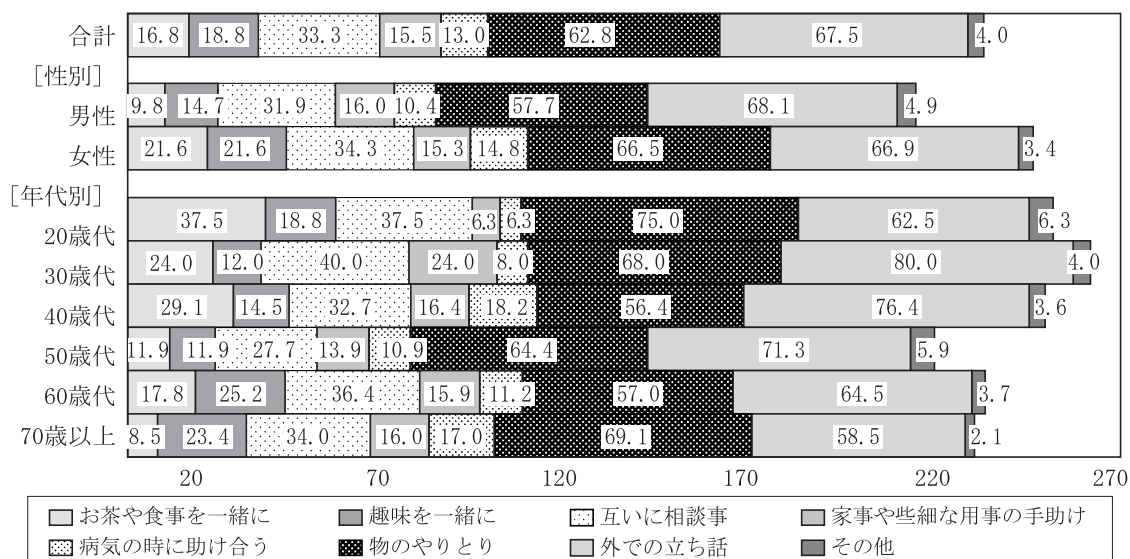
近所の人との付き合いかたについて質問した。回答の仕方は該当すればいくつ選択しても良いという複数回答である。

結果は図4の通り、「外での立ち話」「物をあげたりもらったりする」が多く、「相談事があった時、相談したり、相談されたりする（以下：互いに相談）」が3割をいどとなっている。

性別では女性の方が近所との交流は多かったのがあるが、男性に比べて多いのは「お茶や食事を一緒に」「趣味を一緒に」である。

年代別では、年代が高くなるに従い「お茶や食事を一緒に」「趣味を一緒に」が少なくなる傾向があるが、60歳代以降になると「趣味を一緒に」が増加する。また、年代が高くなるに従い近所との付き合いが「外での立ち話」「物をあげたりもらったりする」も含め、全体的に低下する傾向が認められる。

図4 近所の人との付き合いかた（多重回答）



## ② 近所の人との会話の頻度と近所の人との付き合いかたの関連

付き合い方は日頃の交流と関連が強いと考えられるため、表1に近所の人と話す頻度と付き合いの関連を示した。これによると、「ほとんど毎日話をする」「週に4、5回話をする」関係の人は「物のやりとり」を良くしている。話をする頻度が低下するに従い「外での立ち話」が増加していく傾向がある。

また、当然のようであるが、「一緒に食事」「一緒に趣味」「互いに相談」についても話す頻度が多いほど活発である。

## 3. 付き合いの満足度（問8～10）

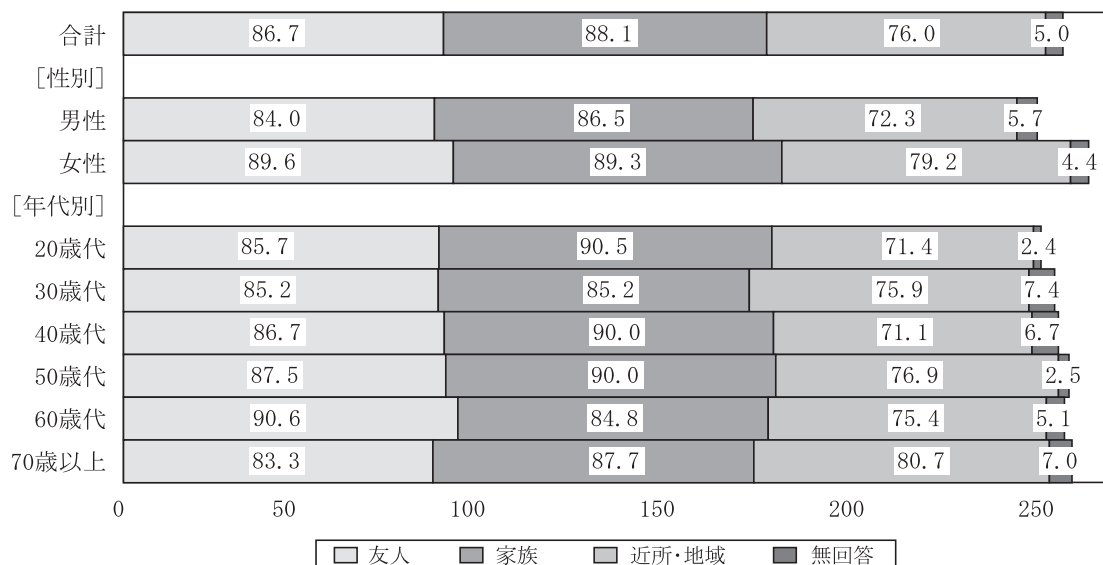
付き合いの満足度として、問8の友人、問9の家族や親類、問10の近所・地域の人との満足度を問う質問に対する回答について、各々「大変満足」「まあ満足」「やや不満」「大変不満」の回答から「大変満足」「まあ満足」を加えて「満足」としてまとめた結果を図5に示した（質問と回答結果の詳細は付録を参照）。

表1 近所の人との会話の頻度と近所の人との付き合いかた（多重回答）の関連

	一緒に お茶や食事を	趣味を 一緒に	互いに 相談事	家事や些細な 用事の手助け	病気の時に 助け合う	物のやりとり	外での 立ち話	その他
ほとんど毎日	18 25.7	21 30.0	39 55.7	19 27.1	16 22.9	50 71.4	34 48.6	4 5.7
週に4、5回	20 26.7	14 18.7	37 49.3	14 18.7	15 20.0	61 81.3	42 56.0	2 2.7
週に2、3回	23 16.9	36 26.5	41 30.1	19 14.0	16 11.8	87 64.0	94 69.1	9 6.6
週に1回	6 5.0	4 3.4	16 13.4	10 8.4	5 4.2	53 44.5	100 84.0	1 0.8

結果は「友人」「家族・親類」「近所・地域の人」ともに「満足」と回答した人が7～8割以上を示し、満足度が高いことが分かる。上述の近所の人と話をする頻度の少ない人も満足度は高いことになり、自分に合う付き合いをしていることを示している。これまでの多くの調査結果が示していることは、この結果と同様である。つまり、近隣との付き合いがないからといってそれが不満ではなく、本人にとっては理想の付き合いかたであるという結果が得られている。そのために性別でも年代別でも付き合いの満足度は高く、属性による大きな差異は認められない。

図5 友人・家族・近所・地域のつきあいの満足度



#### 4. 近所の人との協力や支援の必要性（問12）

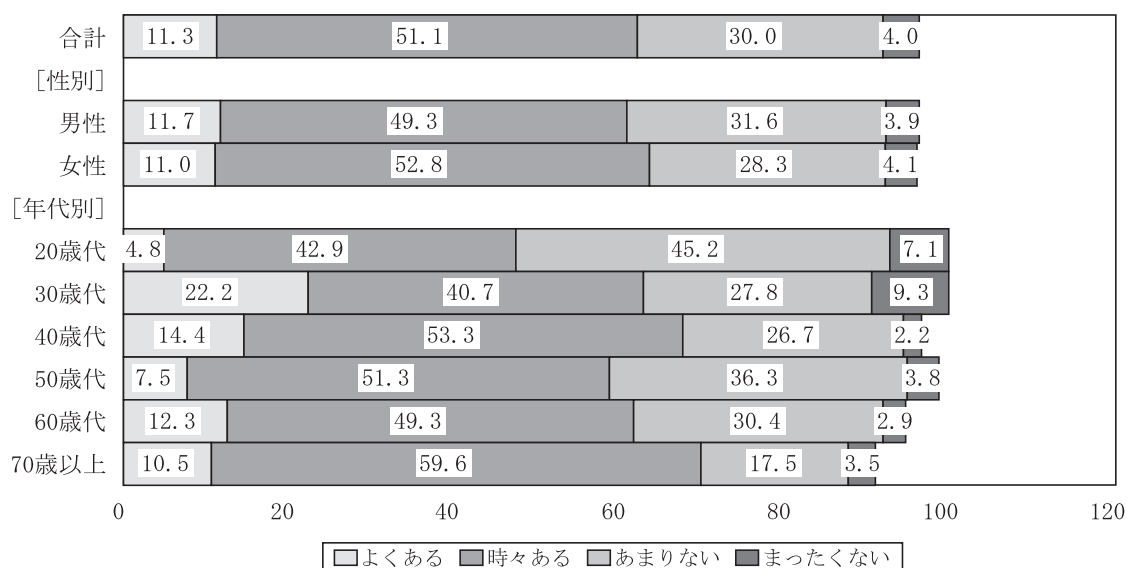
##### ① 近所の人との協力や支援の必要性（問12、13）

「近所の人との日頃の付き合い以外に、協力したり支援したりすることの必要性を感じたことがありますか」という質問への回答結果である。

図6に示す通り、全体では「良くある」「時々ある」の合計が6割以上であるが、性別は大差が認められず、年代別では一定の傾向も認められない。しかし、年代別では、30歳代では「子ども」

のことで「よくある」が増加し、40歳代以降は徐々に子どものことから「日常生活の些細な面で  
の支援や手助け」が必要と思える時が増えると推測される結果になっている。

図6 地域の人との協力の必要性

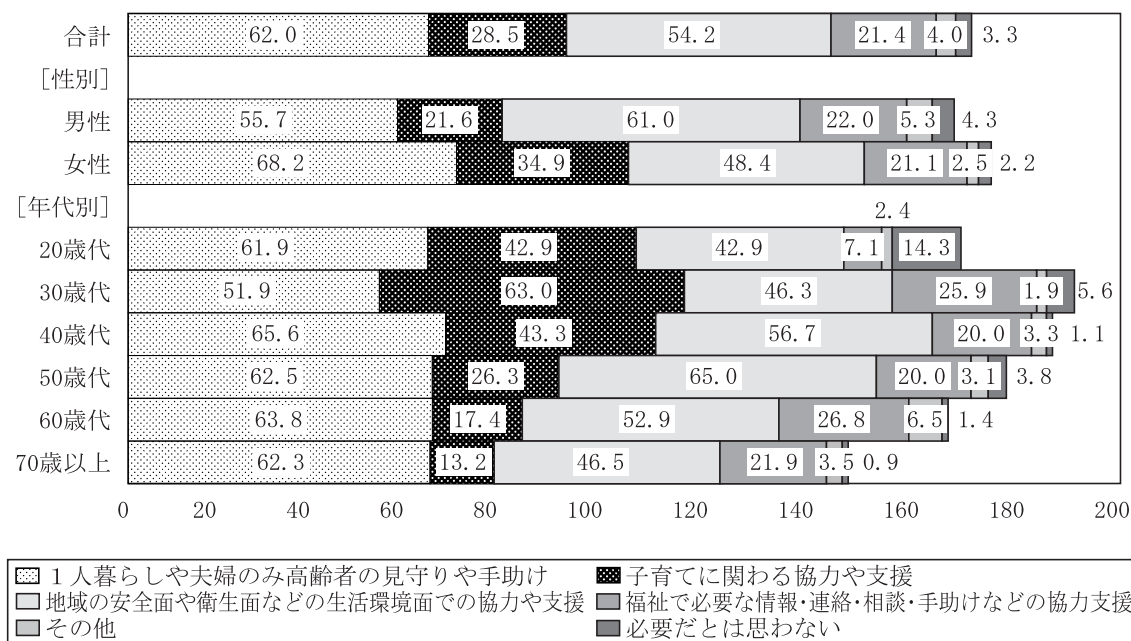


② 協力や支援を必要とする内容（問13）

具体的に近所の人との協力や支援を必要とすることについて、該当する内容をすべて回答する複数回答で質問した結果が図7である。

図の通り、必要なことは「1人暮らしや夫婦のみの高齢者の見守りや手助け（以下：見守り、手助け）」「地域の安全面や衛生面などの生活環境面での協力や支援（以下：生活環境面）」が多いの

図7 近所の人と協力や支援が必要と思うこと



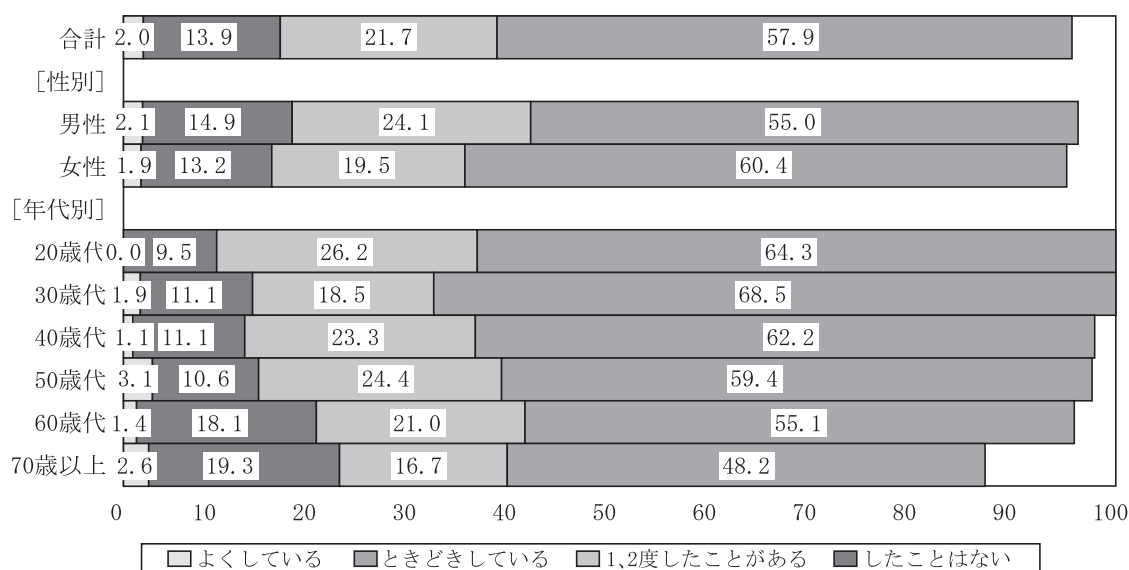
であるが、「子育てに関わる協力や支援（以下：子育て）」に関しては女性が多く、年代別ではと30歳代に顕著に多くなっている。これは年代が高くなるに従い低下していくが、「見守り、手助け」「生活環境面」に関しては各年代ともに共通して必要と感じている協力や支援である。

また、年代が高くなるに従い必要な協力・支援の種類が少なくなる傾向がある。さらに、「福祉で必要な情報収集や提供、連絡や相談、書類の作成などの協力や支援」についても年代が高くなるに従い増加する訳ではない。

## 5. 高齢者のための日常生活の手助けの経験（問 14）

「買い物や家事手伝い、病院への送迎などの日常生活の手助けをしたことがありますか」という質問への回答結果が図8である。これによると「よくしている」「時々している」のは15%程度であり、多くの人が行っているとはいえない結果である。しかし、上述の通り、高齢者自身のニーズも、「見守り」は必要だか「福祉的手助け」を多く必要としている訳ではない反面、年代が高くなるに従い「時々している」人が増加する傾向がある。

図8 高齢者への日常的な手助け



## 6. 意見への態度

### ① 社会発展のために少数を犠牲にする（問 15-1）

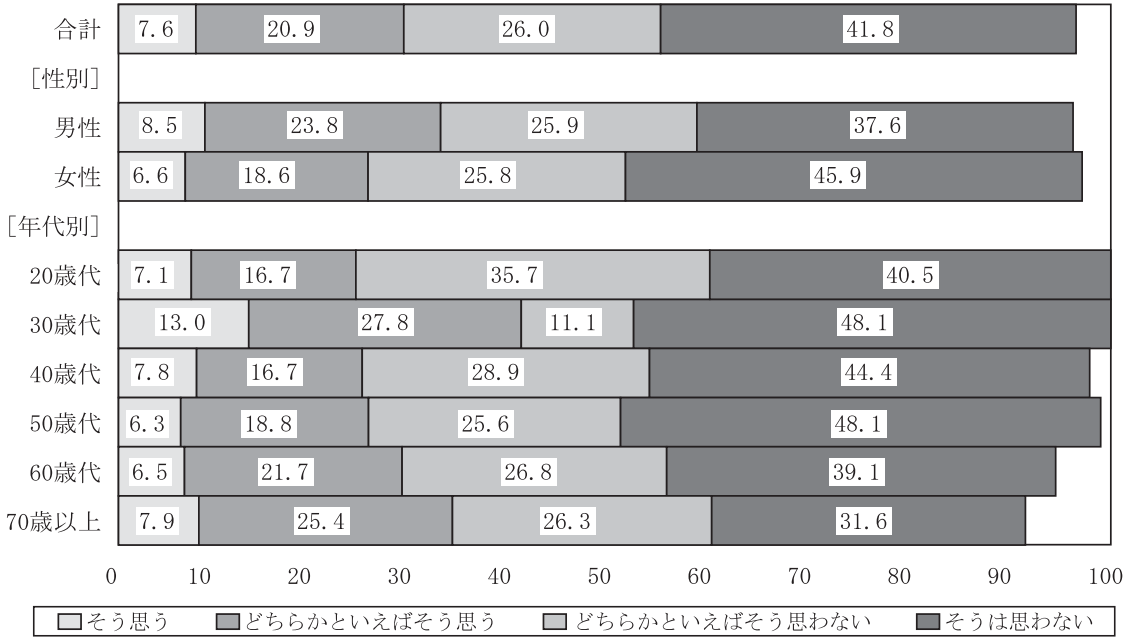
「社会の発展のために少数の人々が犠牲になるのは現実としてやむを得ない」という意見に対する賛否を質問した結果が図9である。

7割近くが「そう思わない」と回答しているが、「思う（以下：「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を加えた）」は3割程度存在する。

性別では男性の方が「思う」が多く、年代別では30歳代が顕著に多い。また、年代が高くなるに従い「思う」が増加する傾向がある。

### ② 自分が正しいと思っても反対が多いことはしない（問 15-2）

図9 社会発展と少数派の犠牲について



「自分だけはどんなに正しいと思っていることでも、たくさんの人が反対することはやらないほうがよい」についての賛否は図10に示した結果になった。

この意見に関しては約7割が「思う（以下：「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を加えた）」と回答した。あくまでも自分の考えを通すのは少数派である。この点は性別で差はなく、年代別では20歳代と60歳以上が類似している。30歳代から徐々に「思う」が増加していく傾向が認められ、世代による違いが存在する。特に「そう思う」は世代間の差が大きい、20歳代が特異な結果を示している。

図10 「自分だけが正しいと思っていることはしない(ながいものにまかれる)」について

